

瑠璃壇考

——信州善光寺の場合——

小林 順彦

信州善光寺の本尊は一光三尊阿弥陀如来とされ、絶対秘仏であり誰も窺い知ることとは出来ない。その本尊が安置されている部屋は「瑠璃壇」と呼ばれ、善光寺のなかで最も神聖な場所である。従ってそこに入れる者は善光寺本坊大勧進正副住職三名、並びに天台宗堂奉行職五名の計八名に限られ、他は一切の入室を禁じられている。

ではなぜ阿弥陀如来の安置されている部屋が「瑠璃壇」と呼ばれるのか。江戸時代に家世々本坊大勧進に仕えた博学岩下貞融も、その著『芋井三寶記』で「瑠璃壇といひつたえなれば、本尊は薬師ならんなどという人あり、なづみたるせつなり云々」として、明確な根拠を出していない。確かに本尊が東方浄瑠璃世界の教主である薬師如来であれば、「瑠璃壇」という名称の理由も肯首出来るが、本尊は阿弥陀であり薬師ではない。明治に刊行された『善光寺小誌』では、「瑠璃壇は須弥壇の意なり。本寺に於て殊に瑠璃壇と呼ぶる。」として、瑠璃壇を道場内に置かれる須弥壇として捉えている。しかし通常須弥壇は、木または金石などを以って須弥山形の壇を造り仏像を安置する壇をいうのであり、仏像を安置している部屋を指すものではなく、この説明も肯首出来かねる。

そもそも「瑠璃壇」という語は、「戒壇」のことを指すようである。わが円仁(七九四―八六四)の『入唐求法巡礼行記』

(以下、『行記』と略す)開成三年(八三八)十月十九日の条には、「唯五台山に戒壇一処、洛陽の終山に瑠璃壇一処のみ。此の二つより外は皆悉く禁断せり」とあり、開成五年(八四〇)四月十四日の条では、「晩際戒壇院にはいつて新置の壇場を視る。(中略)壇色は青碧なり。時人云う、「瑠璃色を取る云々」と」とあるように、「瑠璃壇」は恐らくは瑠璃瓦を用いて築壇された故に名づけられたものと考えられる。

翻って善光寺の場合はどうかであろうか。先に「瑠璃壇」は戒壇の事を指す語であると述べたが、戒壇と言えば善光寺には「戒壇めぐり」がある。しかし「戒壇めぐり」の「戒壇」は後世の命名であり、「瑠璃壇」を戒壇とを会通させることは困難と思われる。『善光寺史研究』では、「善光寺の戒壇は其实回壇にして俗に『お台座めぐり』と云ふも最も名実適ふを見る。台家の戒壇は大乗に授くる所にして其様全く異なり。」といい、戒壇は実は回壇の意で、本尊安置の台座として捉えている。実際この戒壇めぐりで授戒儀礼が行なわれたという事実は無く、これと似たような記述は、史書並びに風俗史に散見されることから、本来戒壇が持つ意義を、善光寺の「戒壇めぐり」に適用することにも無理がある。

ならば「瑠璃壇」はどのように解釈すればよいか。これはあくまでも推測の域を出ないが、宝永年間に本堂が再建された時の設計図が三種現存している。この中の一つに「瑠璃壇」を「瑠璃殿」と記述しているものがある。寛文八年版善光寺縁起にも「瑠璃殿」の語が見られるから、全くの誤植とも考えにくい。「瑠璃殿」は『行記』開成四年(八三九)一月三日の条に、

「南岳大師の顔像を尋ね写して揚州竜興寺に着す。勅して法花道場の瑠璃殿の南廊壁上に安置せしむ。」とあり、法華道場の中の一道場であったことがわかる。『法華経』には「阿逸多、若し善男子、我が寿命の長遠なるを説くを聞きて、深心に信解せば、（中略）この娑婆世界、その地瑠璃にして、坦然平正に、閻浮檀金、以って八道を界い云々」として、この娑婆世界が実は瑠璃の浄土であるとの記述がある。況や本尊は閻浮檀金製である。室町時代の善光寺は法華・常行両道場を有していた。現在に至るまで毎日『法華経』が読誦されている善光寺は正に法華道場なのであり、故に本尊安置の場所は『法華経』に依拠して当初は「瑠璃殿」と称されたのではなからうか。そしてそれがいつしか「宮殿」と混同しないように、特に『瑠璃壇』と変化していったのではないかと思うのである。

『弘智法印御伝記』と即身仏の研究

ジョン・モリス

本報告は日本と日本以外の場所でミイラになった聖なる人々の思想史に関するプロジェクトの一部である。先行研究では、弘法大師入定説が、主に江戸時代のものである「即身仏」に最も重要な影響を与えたことが認識されている。発表者の研究において、弘法大師入定説と『平安往生伝集』における遺体が腐敗しないことに関する瑞相思想の関連性が注目される。また、『元亨釈書』十一などによれば、高野山で空海以外の僧侶が、

空海入滅一三三年後に成立された九六八年の『金剛峯寺建立修行縁起』において始めて記録される弘法大師入定説が語るような遺体が腐敗しない話もある。従って、比較的早い段階から真言宗の中において弘法大師の入定を真似ることが見られる。しかし、空海が本当に「入定ミイラ」になろうとしたことは非常に疑わしいので、空海を真似た僧侶は入定説か、空海の思想か、あるいはその両方を真似たのであろうか。即ち、空海の『即身成仏儀』における「即身成仏」との関係は明確なのであろうか。「入定ミイラ」になることが即身成仏することと同様であることを詳しく説明する資料はない。現存最古の即身仏である弘智法印（一三六三年没）に関する資料が比較的豊富である。中には容易に入手できない寺などで保管されている資料があるが、『弘智法印即身仏御縁起』から始まる一時期大変著名であったとみられる弘智法印の伝記となる資料と新潟県海雲山西生寺（智山派）に行つて弘智法印を尋ねた人々の記録がある。その資料の中で特に興味深いのは、本報告の焦点となる一六八五年に成立した『弘智法印御伝記』という江戸時代に人気を集めた浄瑠璃である。弘智法印没二百五十年後に書かれた『弘智法印御伝記』は、もちろん弘智法印の生涯、思想、修行について確実な情報を提供するわけではない。『弘智法印御伝記』の内容は江戸初期の文芸と大衆的宗教思想を反映している。本研究はその作品に見る江戸初期の大衆的宗教における即身仏の捉え方を考察する試みである。平安時代から現代まで即身仏に関する資料のキーワードとなる「往生」、「成仏」、「弥勒」、「弘法大師」などに主眼を置き、本資料に見る理想的な死や、仏に